

# 大正ロマンの生んだフェミニスト： 山田わか・嘉吉の協働と思想（その9）

斎藤 理香

## 要 旨

山田わか（1879-1957）は、日本最初の女性による「文学雑誌」と、かっこ（「」）付きで紹介されることのある『青鞥』（1911-1916）で翻訳や文学作品を発表し、後に婦人問題評論家としての地位を築いていった。今回は、その執筆活動の最初の頃に、わかと同じ『青鞥』に掲載した短い小説「田草とり」（1914年4号）、「女郎花」（1914年12号）、「虎さん」（1915年2号）を紹介する。これらの作品は、女性の自己決定を阻む問題に深く切り込み、時代を超えて読み継がれる力をもつキャラクターを描いた作品とは言えず、また人物像や状況の書き込み不足もうかがわれる。小説はわかの本領を発揮する分野ではなく、その後にかかれたエッセーや評論へとつながる発展への一段階という役割を担ったと捉えられる。

キーワード：山田わか、『青鞥』、『青鞥』の小説

## はじめに

山田わか（1879-1957）は、近代日本の婦人問題評論家として知られているが、1911年に創刊された女性による女性のための雑誌『青鞥』（1911-1917）への参加を機に日本におけるフェミニズム運動第一波にかかわった文筆家でもある。『青鞥』は、「日本最初の女性による『文学雑誌』（堀場1988：6）と、常にかっこ（「」）付きで紹介されてきたのだが、雑誌の主宰者である平塚らいてう（1886-1971）は、必ずしも文学者を志していたわけではなく、「女子の覚醒を促すこと」（岩田1999：36）が彼女の目標とするところで、小説や詩歌のような文学にはあまり興味がなく、むしろ評論をものしたいというような希望をもっていた（平塚1992a：308, 318）。その影響もあるのか、『青鞥』は、後に母性保護論争（1918-1919）と呼ばれた母親業と就業の両立の困難をめぐる論争をはじめ、貞操や墮胎、売春をテーマにした

小説やエッセー、それらの作品をめぐる賛否について、他の文芸誌や論評誌とともにさまざまな意（異）見交換の場を提供してきた。しかし、『青鞥』発刊時、すでに著名な歌人であり詩人であった与謝野晶子（1878-1942）の寄稿「そぞろごと」は散文詩であったし、らいてうが発表した「元始女性は太陽であった」も、詩として読めるような宣言文であり、『青鞥』を女性解放論誌としてだけでなく「文芸誌」として再評価する研究も、特に1990年代以降に増えてきた（新・フェミニズム批評の会編1998、米田・池田編1999など）。さて、今回はそうした「文芸」誌としての『青鞥』にわかが寄稿した短編の小説を取り上げ、それらを、同じ『青鞥』で発表された他の同人の小説の全般的な傾向や彼女自身のエッセーと比較し、その上でわか of 文芸作品を評価してみたい（以下、引用中の旧漢字は新漢字で表記する）。

## 1. わかの小説

わか that 『青鞥』に発表した小説には、発表順に「田草とり」（1914年4号）、「女郎花」（1914年12号）、「虎さん」（1915年2号）がある。わか that 『青鞥』に初めて投稿したのは、オリーヴ・シュライネルの寓話作品である *Dreams*（1891）の翻訳「3つの夢」（1913年11号）で、わかはこれ以後、1915年2号まで *Dreams* 中の短編の翻訳を数編、発表している。これら、評論ではない翻訳文が『青鞥』に発表されている間、わかの上記の短編小説が同誌に同時に書かれていたことはおそらく偶然ではない。岩田（2003）が指摘するように、『青鞥』は1913年10月以降、社則を変更して文学から女性解放論へと雑誌の方向性を転換するのだが、わかも寓話的作品を翻訳するのは最初だけで、その後は2015年3号からレスター・ウォードやエレン・ケイなどの評論文の翻訳を手がけている（斎藤2013:119）。厳密には翻訳と自身が書く評論とは執筆過程は異なるし別物ではあるが、結果的に小説家ではなく評論家の道を歩んだわかは1915年以降小説の類を発表しておらず、『青鞥』の方針転換に合わせるように、わか of 執筆活動も小説から評論へと変化を遂げるのである。

わずか3編の短編だが、まずはそれぞれの概要を記しておく。「田草と

り」(1914年4号)は、吉蔵という農家の男と、生後3か月の赤ん坊を抱いた妻・お光が縁側でゆったりとくつろいでいるところから始まる。お光が、「もしも、あの時お前さんが何処までも頑張つたら此の子はどんなに迷ふだか知れめえよ、なア」と吉蔵にのんびりと声を掛けると、吉蔵のほうはお光の「あの時」という言葉を耳にしたとたん、顔を曇らせる。そして、「あの時」についての彼の回想が始まる。約1年前のことである。隣村にある神社の祭礼に新妻を伴って出かけた吉蔵が帰り道、途中ですれ違った友人2、3人と話を交わす間に、お光の姿がふっと見えなくなる。最初は、何か買い物でも思い出して引き返したのだろうと軽く考える吉蔵だったが、自分に黙って行くのも妙だと思ひ直し、駆け足で今来た道を辿って神社に来てみるものの、お光は見当たらない。不審に思い、今度は家に帰ったに違いないと家路に急いでみるが、お光は戻っていない。いよいよ心配になった吉蔵は、「先刻お光と一所に此処を通った時には自分等は祝福する囁きのやうに聞えた、風に戯れる稲の音が今は自分を呪ひ、自分の足許へ押寄せて来る黒浪のやうに思へた」というくらい絶望的な気持ちになる。そこへ、突然、「(前略)尺除になつた稲と稲の間の田圃道をばかしたやうな白い者が動いて来」て、それがお光だと認めた吉蔵は、次のような行動に出る。

吻として嬉しく思ふたのは束の間、忽ち胸を鎖して居た黒い疑が憤怒と変つて燃え上がった。

『ウヌッ!』

同時にばかッと女の柔らかい横面を打った。

これに飽き足らず、吉蔵はお光の腕を掴み引きずるように家のほうに向かい、座敷に上がるや、2人のただならぬ様子を見て問いただす母親の声を無視して、お光を乱暴に放り出す。そして「此の阿魔!此畜生!今迄何処に居やがつた?」などと激しく責め立てる。さらに、お光の「だつて、半次さんがちよつくら話があるからつて引ばつたもの」という返事を聞いた吉蔵は、怒り狂って彼女を殴り続け、母親と妹、果ては騒ぎを聞いて駆けつけ

た人たちに押さえ込まれる。ここまで思い出した吉蔵は「重い何とも云へない、いやな心持ちになつたが、それでも彼は一時の腹立ちまぎれに其の時お光を逐ひ出してしまはなかつた事を喜んで居る」。というのも、お光が後になって吉蔵の叔母に言ったことが、吉蔵の気持ちを和らげたのだ。

『やつぱり、半次さんは、おいらを思つてるからだんべよなア。だけど、おいらの亭主は誰が何と云つても吉さんだよ』

と [お光が：筆者注] 云つたと云ふ事も思ひ出して腹が立つやうな嬉しいやうな妙な気持ちになつたが結局自分の手にお光がある事は限りない彼には満足であった。

こうして気持ちを落ち着かせた吉蔵は妻とともに変わらぬ日常を過ごすのだ。ちなみに、「田草とり」が掲載された『青鞥』1914年4号は、最初の小説特集（1912年4号）に続く第2回目の小説特集号であった。

男の側から見た日常の瑣事を描いた「田草とり」と異なり、「女郎花」（1914年12号）の主人公は、おきわという既婚女性で、冒頭、彼女は実姉から義兄が危篤で自分に会いたがっているとの知らせを受け、東京から相州（現在の神奈川県）に隅田川の汽船で向かっている。この道中で、死に瀕した義兄のことを、おきわは次のように語る。

（前略）漁師町に姉の夫の八十治が其の瘦せさらぼうた病軀を、四十年間の吝嗇の結果造り上げ厳丈な家の一室に構へて居るのである。

『強欲一点張りな人情の暖さなぞを知らう筈のない義兄がたとひ死に瀕したからと云うて平生冷淡にして居る私に逢ひたいと云ふ動機は何だろ（中略）どう考へても解らない』

おきわの姉・おみよが嫁いだのは、「漁夫の経済に無知なのを利用して築き上げた二三の資産家」の一つであった。おきわの到着を待ちわびていた姉のおみよは涙顔でおきわを迎え入れる。姉夫婦の冷めた関係は、おきわ

の「夫に対してさほど濃い愛情をこれ迄持たなかった姉が今更泣き止まないのを見ると死んで行くものよりも可哀相になつて遂ひホロリとした」というくだりからも読み取れる。また、ここから、おきわが姉宅を訪れた本当の動機は、義兄・八十治の病氣見舞いというより姉の様子伺いのほうにあったらしいこともわかる。姉の嫁ぎ先には年老いた義母のほか、実子がいないため迎え入れた養子の喜七、春夫婦とその幼子がいる。この姉の義母と喜七の態度も、日に日に弱っていく八十治に対しては大変冷ややかで、おきわが、看護の手が足りないとほやく義母に、ではどうして看護婦を雇わないのかと尋ねると、八十治の実の母親とも思われぬような答えが返ってくる。

『なアにね、もう、今日だ、もう今夜はだめだろうってね、三四日も前から皆で云って要るのでね、態々東京から看護婦を呼ぶがものはないってね。……それからお前、永い間溜めて来たんだからね、シコタマ有るだよ、内証のが。だから私がおみよに云ふだがね、早く息のあるうち何処にかくしてあるか聞いて置くやうにつて』

この姉の義母の言葉に、おきわはあまりにひどいと罵倒したくなるほどの気持ちになる。さらに、姉のおみよが7、8年前に夫の冷たさに耐え兼ねて婚家から実家に逃げ帰って来た時、自らの母親が、姉に向かって「八十治はね、あんな弱い体だから永生きする気遣ひはないよ、どうして永く生きられるものか。あれが死にさへすりゃ、もう、しめたもんだ、あの屋敷も身代も皆お前のもんぢゃないか」と言っていたことを思い出し、「自分の体がかう云ふ頭を持って居る人間の血や肉を伝承いで出来上がつて居るのかと思つて、今更乍ら、情けなくも亦不思議に感じた」と述懐する。養子の嫁の父親やら近所の人々も三々五々病人を見舞いに来るが、交す会話はすべて、八十治が亡くなった後の細々とした段取り等に関する事で、「まるでお祭りの相談でもするやうに気安く彼等は話し合つて居る」ようにおきわには聞こえる。そしてその夜、息を引き取った八十治は、養子の喜七や義母が当初から予定していたとおり仮埋葬されるため、ごく簡単な通夜の後、家から運び出

されて行く。その後、これまた簡素な葬式の後、姉妹は個人の眠る墓地に行き、姉のおみよはおきわに、自分の亡夫との結婚生活について「ほんとに冷い死んだ様な夫婦だつた」と嘆き、「実は此の人は死んだ後迄私の体をしばつて置きました」と言い、夫が残した遺言をおきわに告げる。

『実子のない私が一人になつた時には無淋しいだらうから、いくらか楽しみになるやうに財産の幾分かを分けてやれと喜七に云ふんです。それだけならいゝんですが、もし私に不正と思ふ行為があつたら容捨は、いないから、素裸にして投げ出せ！ッて……』

これを聞いたおきわは、姉を思つて涙を湛えながらも、くよくよとした姉に対して言い放つ。

『姉さん、あなたは、自分の力で、太陽の光を直接に吸収して、生きて行く事はどんな心持のするものだか、味つて見る気はありませんか』

最後は、おきわが夕暮れに東京行きの汽船に乗って沖のほうを見つめているという描写があり、「おみよの事は此の時、まるッきり彼女の頭の中に無な<sup>ママ</sup>かつた」と締めくくられている。

ここで3番目に紹介する「虎さん」(1915年2号)も、「私」とその姉が登場し、田舎に住む両親を訪ねるところから話が始まる。生家は比較的大きな農家で名家であるらしい。「私」は今や「金縁の眼鏡なんかかけこんで真面目くさつた顔して」おり、散歩に出て見かける近隣の住人に対して「十年たつても十五年過ぎても恐らくは彼等の命のある限りは貧しい村の子供等の小使銭をあてにさもしい生活を続けなければならぬ彼等の運命を憐ん」でおり、「今彼等に言葉をかけるのも変、それだけの親しみはないのだから、と云つて知らん顔して居るのもなんだか調子が悪い」という心持ちになるような社会的立場にいる。そして寺の屋台店で働く「色の青黒い穢しい男」が小学校の友達で、かつて「肉の張りきつた血色のいゝ二十歳前後の八

さん」であることに気づき、その変わり果てた姿に胸をつぶし、周りに集まってきた「八さんの倅を写した顔」をした「汚い子供等」に小遣いをやったりする。かつての村の生活への郷愁と嫌悪とが混じり合ったような気持ちの「私」に対し、姉はいらいらした態度を見せる。そんな中、二人に声をかけてきた老婆がいた。「私」はその人の息子「虎さん」を思い出す。

虎さんは、野菜などを天秤棒に載せて売りさばく商売をしており、「私に恋文を送って見たり、近所の女房<sup>かみ</sup>さんを頼んで見たり、憂身をやつして口説いて」きて、当時の「私」には、「恋と云ふ言葉の意味はまるで謎のやうなものであった」から、全く相手にしなかったのにしつこく言い寄ってきた男だった。以来、「私の前に膝まづいて忠実な奴隷のやうに私にかしづ」く虎さんが「私」の夢に時々現れた。今、目の前にいる老婆によれば、虎さんは6人の子を残して病死したという。虎さんが「私」の姿見たさに、夜更けまで家の周りをうろろうとしていたのを、兄が見とがめて、「いゝか、先祖代々清くつゞいて来た此の家の血統をどうぞ汚してくれるなよ」と「私」に言い聞かしていたことなどを思い出し、次のような感傷に浸る。

あゝ、気の毒な虎さん、(中略)もしあの時分に虎さんのうちと私の家が同格の家柄であつたなら虎さんはあんなにも苦勞をせずに堂々と結婚を申し込んで来たのであつたらうに。(前略)幸か不幸か私が虎さんの心のうちを思ひやるやうになつたのは私の身の上にも幾多の変動があり、虎さんにも子供迄出来た後であつた。あゝせめて一度でもしんみり優しい言葉をかけてやりたかった。

そして、「私」が近所の子供に施したり、老婆に声をかけたりする様子に終始一貫して苛立ちを覚えている姉に、虎さんとの昔のいきさつを告白する。

『虎さんはもう此の世に居ないから云ひますがね……実は……後から考へて見ると、あの人は余程私を大騒ぎして居たらしいんですよ』

すると姉は、次のように答えて、この話は完結する。

『アラ厭だ。あの男が？あなたにも何にか云ひかけたの？』

私は目を円くして姉の顔を見詰めた。

『私をさん／＼困らしたんですよ、あの人は』

『えッ！』

『其の後に又妹のあなたを口説いて見るなんて随分彼奴は恥知らずだったのね』

其の後虎さんは私の夢に現れて来なかった。(終り)

## 2. 『青鞥』の小説との比較

わかの小説3編について、多くの引用を交えて詳しく内容を紹介したが、わかの小説は、これまでの『青鞥』研究でもあまり紹介されることはなかった。わずかに、『青鞥』小説集を分析した岩田ななつが『青鞥』1914年4号で初めて小説を発表した4人の書き手の一人としてわかについて論じているくらいで、その作品が上記の「田草とり」である。岩田(1999:44)は「この小説にはささいなことで新妻を殴りつける男が登場する。しかし作者の視点はそれほど殴る男に対して批判的とはいえず、むしろ女のたくましさを強調して描いている」と軽く触れるにとどまっている。そして、ここで岩田は「なぜ『青鞥』の小説が文学史に記憶されなかったのか」という問いを立て、その答えの一つとして、「『青鞥』の女たちにとって、悩みや喜びをともに語ることのできる先駆者たる友人であり、そのため時代を越えて現代まで読み継がれてきた」「そのような女主人公が『青鞥』の小説には創造されなかった」と述べている(岩田1999:53-54)。『青鞥』にはそのような限界があったことは否めないと思われるが、一方、江種満子は、『青鞥』が登場する以前の「文壇」すなわち男性作家が主導する文芸雑誌や総合雑誌において女性作家が発表してきた作品と『青鞥』の小説とを比較し、同じ女性作家が、「女の自己決定を困難にする性差の文化が、ジェンダーのシステムであることを小説をとおして示そうと」する際に、自然主義全盛の文壇で発表する場合と



は異なり、『青鞥』では「自身の思いを直截簡明な構成で書く傾向を示す」と指摘している（江種1998：24）。わかの小説にも、岩田や江種が『青鞥』の小説群に認めたような特徴が見られるだろうか。

「田草とり」は、岩田（1999）も言うように、作者（わか）は妻を殴る夫に対して批判も批評も含んではないようだ。むしろ、「おいらの亭主は誰が何と云つても吉さんだよ」という妻の言葉を反芻しながら悦に入っている、間抜けと言ってもいいような無邪気な夫の姿を描いている。しかし、もし、夫がおめでたい人間であることを描こうとするのなら、妻のほうをもっと狡猾な人間として描いたほうが効果的だろう。実際は、この話の最後の一文に、夫婦の姿を「稲田の中に二つの菅笠が睦そうに並んで居た」とあるので、夫がかつとすると見境なく妻に殴りかかるような男であっても、それは妻への愛情ゆえであり、妻も夫への愛ゆえ殴られることに恨みを抱かない、そんな関係性を描いているようである。夫の妻への暴力はこの時代でも問題視されていたが、この話の中の殴られる妻は、我慢を強いられている女として描かれているわけではなく、殴られてめめめめしていない。その意味では、岩田が述べたように、「女のたくましさ」が示されているのかもしれない。しかし、それ以上に、この農家の夫婦像は、「並んで居る」「二つの菅笠」に象徴される横の関係に表れているように思える。だとするなら、縦の関係を強調する家父長制とは対極にあるものが提示されていることになる。しかし、そんな意図が作者によって「直截簡明」な形で描写されているとはいいがたく、吉蔵やお光の心の変化などを丹念に追うようなところもないため、作品の完成度が高いとは言えない。

「女郎花」のほうは、姉の婚家とその妹の視線を通して描いた話だが、愛のない結婚生活を嘆く姉の様子、またその姉を最後には突き放すような妹の心持ちを描いている点で、「田草とり」よりも家族や家父長制に縛られる女性に対する問題意識が表れている。しかし、「女の自己決定」をテーマに据えようとするならば、反面教師として登場する姉に批判的な妹・おきわの視点をもっと強く、またおきわ自身の状況も綿密に描かれていなくてはならないだろう。読者は、おきわの視線を通して姉夫婦と婚家の義母、養子も含

め、互いの関係が冷え切っていることにはすぐに気づかされるが、ではその批判の目を向けるおきわ自身の生活はどうかについては、ほとんど知らされない。姉がもともと愛のない結婚をしていたという情報が与えられているだけで、それだけが批判の対象になっているかのような、もやもや感がぬぐえない。やはり、おきわ自身の境遇がもっと描かれるべきであって、たとえば、おきわが自立した女性として、独りでたくましく生活を送っているのならば、それを描いて初めて、自分の生活保障を得るためだけに婚家に留まり、そのことにことさら疑問を感じないような姉に対するおきわの批判的な視線が説得力を持ちうるだろう。あるいは、おきわ自身、「女の自己決定」を行使しているわけではないという設定で、姉と同時に彼女自身にも向けられた疑問や煩悶を描く、という方法もあったと思われる。その点でも、おきわの人物造形は極めて中途半端である。つまり読者にとって魅力ある人物になりきれていないのも、この作品の弱いところであろう。

最後の「虎さん」は、ユーモラスなオチがある作品だが、女性にとってシリアスな家族、恋愛、仕事、生き方などをテーマにした『青鞥』のほかの小説作品と比べて、いい意味でも悪い意味でもつかみどころがなく、強い印象は残らない。しかし、深読みかもしれないが、これを当時としてそれほど若くはない、分別のあるはずの女性——必ずしも自身をモデルにしたとは言い切れないが、1915年のわか自身の実年齢は36歳であった——の自意識過剰な中に仄見える階級意識を前面に押し出し、そういう意識に囚われた女の自己欺瞞に対する自虐的な笑いを滲ませている、ととらえるのはどうだろうか。自虐的だというのは、主人公の女は多分にわかの分身ではないかと思える設定になっているからである。わかの実家は、現在の横須賀市にあたる久里浜にある農家である。一時はわか在地元の資産家と最初の結婚をしたり、アメリカに出稼ぎに行く決意をしたりするほどに経済的に困窮したが、貧農というわけではなく、わか自身がエッセーで「傾きかけた旧い大きな家」(山田1916:107)と称するくらいの、ある程度の規模の農家で、家格に関しては矜持があったらしい。江戸時代の身分制度が取り払われた時代になっても、家柄の善し悪しについての意識は強く、同じ農家の間でもあからさまな上下

関係があっただろうことは想像にかたくない。

「虎さん」の主人公は、かつて一緒に外で遊びまわったこともあるだろう幼馴染を「色の青黒い穢しい男」と描写し、「子供等の小使銭をあてにさもしい生活を続けなければならぬ」と憐れんでいるかのような描写になっている。しかし、これは憐れみではなく、蔑みに近い感情だろう。そして、彼女にしてみれば身分不相応にもかかわらず自分に言い寄ってきた虎さんに対しても、同様の蔑みの視線を向けるのだ。軽蔑する人物に「あゝ、気の毒な虎さん、(中略)あゝせめて一度でもしんみり優しい言葉をかけてやりたかった」とは、何とも偽善的な、自己欺瞞に満ちたことばである。しかし、話はこれで終わらない。最後に、虎さんが実は自分の姉に求愛して断られてから自分のほうに来たのだとわかり、「私」の優越感に浸って悦に入るといふどうす黒い愉しみは打ち砕かれてしまう。「気の毒な虎さん」は、実は姉妹のうちどちらでもいいから手なづけようと策を練っていたのかもしれないし、またはそこまで考えていなかったかもしれないが、ともかく「私」に純粹に恋焦がれていただけではなかったのだ。このことに気づかされたのが、思春期の少女ではなく、おそらく30代も半ばの知的な女性であるところから、多少の教養や社会的立場があっても、うぬぼれや優越感は自重すべきとの、つまり『青鞥』の女性たちや読者への忠告のメッセージと見なせるのではないだろうか。そう考えると、「私」は女性にとって魅力的なキャラクターとは言えないし、話の内容も「女の自己決定」を直截訴えるようなものではないが、そこに顕れた自虐的なユーモアをポジティブにとらえれば、与謝野晶子が「そぞろごと」の中で、「すべて眠りし女今ぞ目覚めて動くなる(中略)一人称にてのみ物書かばや」と、眠っているすべての女性に覚醒を訴えたのにも近い、励ましのメッセージとも捉えられるかもしれない。

実は、小説の主人公よりも、もっとわか自身の内なる気持ちが吐露されているのは彼女のエッセーのほうである。『青鞥』1916年1号掲載の「自分と周囲」には、次のようなくだりがある。

私が暗黒界をぬけ出た当時、私はその世界の人間（それは事に男性）が

憎くて／＼私の心身はその憎しみの焔で燃へて居た。「己れどうして呉れやう。人の弱みにつけこんで思ふ存分人の生き血を吸ふとする悪魔、頭から石油をぶつけて裾から火をつけて焼いてやるから見て居れ」。こんな風に男性を敵んで居た。そして可笑しい事には自分が男性征伐の旗を掲げてまつさきに立つと、男に苦しめられたありとあらゆる女の亡者迄もが、皆墓の下から白い経帷子のまゝで出て来て私のうしろに立つ。(中略) だから一寸でも自分に接近する機会のあつた婦人が男に虐待されたの、利用されたのと云ふと私はすぐ自分の命を投げ出して所謂その悪魔征伐にとりかゝるのであつた。

引用の1行目の「暗黒界」とは、わかが騙されてアメリカに渡ってから数年を過ごすことになった売春窟のことだろう。彼女は生涯、アメリカにいた頃の経験について書き残さなかった。ほかには平塚らいてうの自伝に、わかから直接聞いた話として、わか「数奇な」苦労話が簡単に記されているだけなので(平塚1992b:172) わか自身の文章としては、このエッセーがほぼ唯一、彼女の経験をほのめかした告白文とも言える。この引用の後には、こうした激しい感情にとらわれていた自分が、その頃に出会い、後に夫となった山田嘉吉に「其の情熱を押へて学問なさい」と諭されたことで変わっていったということが記されている。

このエッセーと、これに先立つ小説作品の間には、読者に直接アピールする力強さがあるかどうかという点で大きな開きがある。これは、わか『青鞥』において翻訳、小説、エッセーと自分の執筆活動の領域を徐々に発展・進化させ、最終的に評論を書くところまでに成長していった過程として捉えられるのではないだろうか。自分の経験をフィクションとして描くこともできたのでは、と言えなくもないが、しかし、わかにとっては思い起こすのも辛い、あまりに苦々しい経験だったため、他人事のようにして書くことはできなかったのだろう。

### 3. まとめ

婦人問題の評論家である山田わかには小説の類をほとんど創作しなかったが、実は「芸芸誌」『青鞥』で短編作品を発表していた。わかの小説がこれまで顧みられることがなかったのは、今回、作品を鑑賞してみて、岩田（1999）や江種（1998）が指摘するような、女性の自己決定を阻む問題に深く切り込み、時代を超えて読み継がれる力をもつキャラクターを描いた作品、という条件に当てはまらないことが一つの要因であろうことが確認できた。さらに、人物像や状況の書き込み不足といった、小説として成立するための要件も満たされているとはいいがたいこともわかった。実は、こうした作品の傾向は、ほかの『青鞥』の作品にも一般的に言えることで、わかだけに向けられる批判ではない。それはそれとして、わかの小説をものしたのは、おそらく自身の文学への情熱というよりも、『青鞥』という場を借りて徐々に自身を表現していくステップとしての意味合いが大きかったのではないだろうか。わか、今回のような小説作品を3編しか残しておらず、その後に「告白」とも言えるようなエッセーを書き、1920年以降、『婦人と新社会』という個人雑誌を創刊して評論活動を本格化していったことが、そのことを物語っている。

#### 参考文献

- 岩田ななつ（1999）『『青鞥』の小説——自己表現への熱い思い』米田佐代子・池田恵美子編『『青鞥』を学ぶ人のために』pp. 36-55 世界思想社
- 岩田ななつ（2003）『文学としての「青鞥」』不二出版
- 江種満子（1998）「知としての〈女〉」の発見——小説 日本文学協会 新・フェミニズム批評の会編（1998）『『青鞥』を読む』pp. 13-35 学藝書林
- 五味百合子監修（1993）『婦人と新社会』第1-7巻 クレス出版
- 斎藤理香（2013）「大正ロマンの生んだフェミニスト：山田わか・嘉吉の協働と思想（その4）」『ことば』34 pp. 111-125 現代日本語研究会
- 日本文学協会 新・フェミニズム批評の会編（1998）『『青鞥』を読む』学藝書林
- 平塚らいてう（1992a）『元始、女性は太陽であった 平塚らいてう自伝1』大月書店

国民文庫

平塚らいてう (1992b) 『元始、女性は太陽であった 平塚らいてう自伝2』 大月書店

国民文庫

堀場清子 (1988) 『青鞥の時代——平塚らいてうと新しい女たち』 岩波書店

堀場清子編 (1991) 『「青鞥」女性解放論集』 岩波書店

与謝野晶子 (1911) 「そぞろごと」『青鞥』 1号 pp. 1-9 HathiTrust Digital Library,

University of Minnesota

米田佐代子・池田恵美子編 (1999) 『「青鞥」を学ぶ人のために』 世界思想社

山田わか (1914) 「田草とり」『青鞥』 1914年4号 pp. 1-8 HathiTrust Digital Library,

University of Minnesota

山田わか (1914) 「女郎花」『青鞥』 1914年12号 pp. 43-60 HathiTrust Digital Library,

University of Minnesota

山田わか (1915) 「虎さん」『青鞥』 1915年2号 pp. 15-28 HathiTrust Digital Library,

University of Minnesota

山田わか (1916) 「自分と周囲」『青鞥』 1916年1号 pp. 107-111 HathiTrust Digital

Library, University of Minnesota

(さいとう りか：ウェスタン・ミシガン大学)

(2018.11.12 受理)